

大学生における子どもへの関心の諸要因¹⁾

—乳幼児との接触経験・内的作業モデル・他者意識の影響—

扇原 貴志*・上村佳世子**

Factors of Interest in Young Children among University Students:
The Influences of Contact Experience with Infants,
Internal Working Model, and Other-Consciousness

Takashi OUGIHARA* and Kayoko UEMURA**

Factors determining university students' interest in young children were investigated. It was hypothesized that experience of contact with infants, internal working models (IWM), and other-consciousness would determine interest. A questionnaire survey was conducted with university students ($n=229$) to test this hypothesis. Multiple regression analysis indicated that experience of contact with infants during elementary school days and internal-other-consciousness increased interest in young children. On the other hand, an evasive IWM decreased interest. Subsequently, multiple regression analysis was conducted based on gender, which indicated that in men, experience of contact with infants during elementary school days increased interest, whereas in women, an experience increased interest regardless of the period of contact. Moreover, in men, an ambivalent IWM increased "sympathy" among subscales of interest in young children, whereas in women, a stable IWM increased interest. Furthermore, in men, high imaginal-other-consciousness increased interest, whereas in women, high internal-other-consciousness increased interest. Factors determining interest in young children were discussed from the perspective of gender differences.

key words: interest in young children, contact experience with infants, internal working model, other-consciousness, university students

問 題

昨今、少子化や特に都市部における待機児童問題、子どもの貧困といった子どもに関する諸問題の深刻化がマスメディア、ソーシャルメディアを問わず指摘され、人々の子どもへの関心が高まりつつある。

子どもへの関心を取り上げた研究は、古くは Lorenz (1943) までさかのぼる。Lorenz (1943) は、ヒトは子どもを見ると、その身体的特徴(幼児図式; baby schema; *Kindchenschema*) に反応し、注意が引きつけられ、魅力を感じ、関心が喚起されるとした。これは生得的な反応とされ、文化差はなく、特に女性の方が反応は強いとされる (Fullard & Reiling,

¹⁾ 本研究は 2012 年度文京学院大学大学院人間学研究科修士論文として提出し、日本発達心理学会第 24 回大会 (2013 年) において発表したものの一部を再分析・加筆修正したものである。

* 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

e-mail: ougihara@gmail.com

** 文京学院大学人間学部

Bunkyo Gakuin University, Faculty of Human Studies, 1196 Kamekubo, Fujimino-shi, Saitama 356-8533, Japan

1976; Maestripieri & Pelka, 2002; McArthur & Berry, 1987)。

もし、子どもへの関心が生得的に生じるのであれば、そこに大きな個人差はなく、すべての人で子どもへの関心は高いはずである。しかし実際には、子どもに対して無関心であったり、苦手と感じたり、避けようとする者も少なからず存在する。これは、ヒトが持つ生得的な幼児図式への反応のみでは説明しきれない他の要因が、子どもへの関心に影響していることを意味する。それでは、どのような要因が子どもへの関心の高低に関与しているのであろうか。本研究の目的は、その要因を探ることである。

日本ではこれまで、子どもへの関心は養護性や育児性といった概念の一部として検討されてきた。養護性はFogel, Melson, & Mistry (1986)により理論化された“nurturance”に由来し、日本では小嶋(1989)が「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」と定義したもので、その下位尺度には「赤ん坊・子どもへの興味・関心(共感性)」と「子どもをうまく扱える自信(技能)」の2つがあるとされる。

育児性に関しては、大日向(1988)の「育児性」、井上・深谷(1986)の「親準備性」、青木(1988)の「母性準備性」など様々な呼称が用いられてきたが、鈴木・清水・伊藤(2005)は、いずれも概念的には共通しており、子どもへの好意的感情や関心である「子どもへの接近感情(子どもへの関心)」と育児への積極性や自信である「育児不安(子どもに関わる姿勢)」の2下位尺度からなるとした。そして、育児性を「将来親になる準備としての子どもへの関心と子どもに関わる姿勢」と定義した。

このように養護性と育児性の両概念は、いずれもその下位尺度に「子どもへの関心」という感情・認知的側面と「子どもを扱う自信・技能」という実際の育児への積極性や技能の側面を持つことから類似した概念であるといえる²⁾。ただし、「子どもへの

関心」は子どもを養育するか否かに関係なく、個人が子どもに対して有する好悪といった感情や認知を表している反面、「子どもを扱う自信・技能」は、実際に子どもを養育するうえでの自信や技能といった効力感を表している。そのため、青木(1988)や棚澤(2009)は、2下位尺度は構成概念的に異なるとし、2つを分離して別個にさらなる下位尺度や要因について検討する必要があるとした。

こうした指摘を受け、さらなる下位尺度と要因について明らかにすべく、「子どもへの関心」については、扇原・村井(2012)が大学生を対象に3歳から6歳の子どもへの関心の程度を測定する尺度を作成した。「子どもを扱う自信」については、菱谷・落合・池田・高木(2009)が大学生と専門学校生を対象に次世代育成力尺度を作成した。そして、次世代育成力は親から受け取った存在肯定的メッセージや対人的信頼感の高さに影響されることが示されており(菱谷・落合・池田・高木, 2010)、「子どもを扱う自信」に関しては個人差の要因が明らかになりつつある。しかし、子どもへの関心は過去の子どもとの接触経験の多さと正の相関にあることはわかっているが(扇原・村井, 2012)、心理的要因も踏まえた個人差要因については未検討である。

また、従来の養護性、育児性、子どもへの関心、次世代育成力、大人が乳児に対して抱く感情である対児感情といった子どもへの態度に関する研究では、その要因を検討する際に接触経験のみを取り上げるか(例えば、安積, 2007; 花沢, 1992; 中西・牧野, 1989)、内的作業モデル(以下、IWMとする)や親との関係性といった心理的要因のみを取り上げるか(例えば、岩治・井森, 2010; 小林, 2014; 小池, 2013)に分かれている。つまり、接触経験という経験的要因と、IWMといった心理的要因ではどちらの影響力は強いのかといった点や、両要因を互いに統制した場合の結果については未検討である。小嶋(1982, 1989)は、子どもへの態度は多様な要因により形成されるとしており、単一の要因だけでなく、複数の要因を想定した研究が必要である。

そこで本研究では、接触経験という経験的要因と、心理的要因の双方を同時に測定し、子どもへの関心に対する影響を検討することで、その要因について多角的に検討することを試みる。以下では、本研究で取り上げる要因について述べる。

²⁾ 厳密には養護性と育児性は対象が異なる概念である。養護性の対象は子どものみならず、高齢者や病人、障害者や動植物など、あらゆる養護対象を含む(小嶋, 1989, 2001)。一方、育児性は子どもに対する態度のみを示す。しかし、多くの実証的な養護性研究では対象を子どもに限定している(例えば、棚澤・福本・岩立, 2009; 中西・粟津, 1996)。よって、本研究では養護性と育児性を近似した概念として考える。

要因として想定されるもの

乳幼児との接触経験 上述のように従来、子どもへの態度を調べた多くの研究において、乳幼児との接触経験（以下、接触経験とする）がその要因として扱われてきた。そこで、本研究においても接触経験を関心の1要因と想定する。ただし、従来の尺度を用いた接触経験の測定には2つの問題がある。

第1の問題は、弟妹との接触とそれ以外の乳幼児との接触を同一の経験として測定している点である。長子や中間子にとって、弟妹は最も身近な乳幼児であり、接触機会は多いと考えられる。つまり、長子や中間子において弟妹との接触を接触経験として含めると、末子や一人っ子が有するそれよりも多くなりやすく、接触経験の影響を正しく評価できないおそれがある。また、長子や中間子でも弟妹以外の乳幼児とは接触経験がない者も存在すると思われる。つまり、従来の研究では、同じ長子や中間子の間でも弟妹とそれ以外の乳幼児との接触経験を区別できていない。加えて、Nash & Feldman (1981) は幼児から中学生を対象とした研究において、弟妹の有無は乳児への関心に影響しないと報告している。このことから考えても、弟妹の有無という要因は接触経験が子どもへの関心に及ぼす影響を検討するうえでノイズとなる可能性がある。弟妹の有無という要因を取り除き、出生順位にかかわらずに接触経験を評価する最も簡易な方法は、弟妹を除いた乳幼児との接触経験について測定することである。これにより、接触経験が子どもへの関心に及ぼす影響について、より明確に示すことができる。そこで本研究では、弟妹との接触を除いた乳幼児との接触経験を測定する。

第2の問題は、研究によって接触経験の時期が及ぼす影響について意見が異なる点である。例えば、花沢(1992)は、大学生を対象とした調査で、小学校期から高校期の一貫して接触経験が多かった群の方が、少なかった群よりも子どもに対する好意的感情が高いことを示した。一方、石川(2000)は、中学・高校生が幼稚園や保育園などで乳幼児と交流する、ふれあい体験学習を経験した場合、体験後の方が子どもへの好意的感情が高まることを報告した。つまり、子どもへの態度は児童期からの一貫した接触経験により形成されるのか、ふれあい体験学習のような青年期のみを経験でも変化するのかとい

う点で意見が分かれている。小学校期に自分と年齢的にも近い乳幼児と接触すること、いずれ親になることが意識され始める中学・高校期に接触することは異なる意味を持つ経験である可能性がある。接触経験を小学校期と中学・高校期に分けて尋ねることで、接触時期が及ぼす影響についてより細かく検討できるであろう。

愛着スタイル 小嶋(1989)は、乳幼児との接触経験と並んで、親との良好な関係を養護性の要因として想定し、過去および現在において、親と良好な関係にある者は養護性が高いとした。この指摘に基づき、先行研究では、Bowlby(1973)が提唱したIWMと養護性との関連を検討した研究がいくつか存在する。例えば、岩治(2009)は、養護性とIWMの関連を検討し、安定性が正の相関、回避性が負の相関を示すとした。また、愛着スタイルと青年の養育態度の関連を明らかにした研究としてはRholes, Simpson, & Blakely(1995)や、Rholes, Simpson, Blakely, Lanigan, & Allen(1997)がある。これらは、大学生を対象に愛着スタイルと将来子どもが欲しい程度および将来良い親になる自信との関連を検討した。その結果、回避的な愛着スタイルの者は子どもが欲しい程度が低く、良い親になれる自信も低いが、アンビバレント的な愛着スタイルの者は、子どもが欲しい程度は強いが、良い親になれる自信は低いことが明らかになった。子どもが欲しい程度や良い親になれる自信は、子どもへの関心と同じ概念ではないが、ともに子どもへの志向性と考えられ、子どもへの関心の上位概念である育児性の一部であるとみなすこともできよう。よって、IWMが安定的またはアンビバレント的な者は子どもへの関心が高く、回避的な者は関心が低いと予想される。

他者意識 ヒトの乳児は、生後間もない頃から大人のみならず、他児に対しても注視、発声、微笑、手伸ばしをするといった行動が出現する(川井・恒次・大藪・金子・白川・二木, 1983)。そして、幼児期になると、自分よりも年少の者に対して養護性に基づく行動が見られるようになる(小嶋, 1989, 2001)。すなわち、ヒトは生まれながらにして他者全般に関心を持つ存在であるが、成長とともに、自分よりも年少の他者にも関心の対象を広げていくと考えられる。他者全般への関心が年少の子どもへの関心に分化していくのである。

他者への関心を表す概念としては他者意識が存在する。これは、辻(1993)が「他者へ向ける注意、関心、意識などのこと」と定義したものである。

藤後(2005)は、面接調査を通して養護性が高い者は大人の他者に対しても関心が高いことを示唆している。また、郷式(1999)は、大学生と大学院生に1歳児が遊ぶ様子のビデオを見せ、その様子を記述させたところ、他者意識の下位尺度のうち、他者の気持ちや内面への関心である内的他者意識が高い者は子どもの心的状態の記述が多く、子どもの内面に敏感であることとしている。したがって、他者への関心が高い場合、子どもへの関心も高いと予想される。

以上のように、本研究では子どもへの関心の要因として、接触経験、IWM、他者意識の3つを想定し、それらとの関連を検討する。また、子どもへの態度の先行研究では、女性の方が子どもへの態度が好意的であるという結果が示されている(安積, 2008; 花沢, 1992; Maestripieri & Pelka, 2002; 扇原・村井, 2012; 佐々木, 2007)ため、男女差の存在を踏まえて検討する。

本研究の対象を大学生とした理由

本研究において研究対象を大学生とした理由は以下の4つである。第1は、青年期において子どもへの関心が特に高まる(小嶋, 2001)とされるためである。第2は、扇原・村井(2012)による子どもへの関心尺度は大学生を対象に開発されたものであり、先行研究との統一性を保つためである。第3は、青年期のうち、中学・高校生は子どもへのイメージが一面的で漠然としており(伊藤, 2005)、子どもへの関心の程度を尺度により問われても、子どもが持つ「かわいい」といった一面的なイメージのみに引きずられた回答がなされるおそれがあるためである。第4は、中学・高校生では自身が子どもを育てることについて、遠い将来のことと考える傾向があると思われるが、大学生では数年以内に起こりうることとして具体的にイメージできるようになると考えられるためである。

方 法

調査対象・時期

首都圏の私立大学に在籍し、心理学を専攻する大学生234名に調査を行った。このうち、年齢が25

歳以上の者と回答に著しい不備がある者の5名を除いた229名(男性76名, 女性153名; 平均年齢19.21歳, $SD=1.04$)を分析対象とした。調査は2012年5月から7月に実施した。

質問紙

子どもへの関心尺度 子どもへの関心の程度を測定する尺度として、扇原・村井(2012)の子どもへの関心尺度30項目を6件法(1.「全くあてはまらない」-6.「とてもあてはまる」)で尋ねた。

本尺度は3-6歳の幼児への関心の程度を測定するもので、以下の4下位尺度からなる。第1は、子どもを見て、かわいいと思うことによる関心である「好意的注目」(「幼児の姿を見つけるとつい目で追ってしまう」など14項目)、第2は、子どもが不安そうにしている、悲しんでいる時に示す関心である「同情」(「誰でも遊べない一人ぼっちの幼児を見ると、かわいそうになる」など7項目)、第3は、子どもの会話や生活等への関心である「好奇心」(「親に怒られている幼児がいて、なぜ怒られているのか知りたくなる」など6項目)、第4は、子どもが泣き声や大声を出すことへの寛容さである「寛容性」(「幼児の泣き声を聞くとイライラする(逆転項目)」など3項目)である。

乳幼児との接触経験尺度 花沢(1992)の乳児接触体験尺度を参考に作成した6項目(「抱っこやおんぶをしたこと」「服を着替えさせたこと」「一緒に遊んだこと」「添い寝をしたこと」「ご飯と一緒に食べたこと」「手をつないで歩いたこと」)を小学校期、中学・高校期別に4件法(1.「全くなかった」、2.「まれにあった(年に数回程度)」, 3.「しばしばあった(月に数回程度)」, 4.「よくあった(月に数回以上)」)で尋ねた。教示文においては、「あなたのこれまでの弟・妹を除く、赤ちゃん(0-2歳)および幼児(3-6歳の幼児・幼稚園児・保育園児)との接触経験についてお尋ねします」と表記した。

内的作業モデル尺度 戸田(1988)の内的作業モデル尺度18項目を6件法(1.「全くあてはまらない」-6.「非常にあてはまる」)で尋ねた。この尺度は成人の対人態度を愛着スタイルの観点から特性論的に評価するもので、乳幼児期の愛着パターン(安定、アンビバレント、回避)に対応した3下位尺度、各6項目からなる。

他者意識尺度 辻(1993)の他者意識尺度15項目

Table 1 各尺度の信頼性係数と平均得点および男女別の平均得点

		全体	男性	女性	<i>t</i> (<i>df</i>)	<i>d</i>
子どもへの関心						
好意的注目	<i>M</i>	56.13	50.64	58.83	3.87***	0.55
($\alpha = .96$)	<i>SD</i>	15.38	14.71	15.02	(222)	
同情	<i>M</i>	27.66	26.57	28.17	1.73	0.25
($\alpha = .88$)	<i>SD</i>	6.51	7.19	6.12	(222)	
好奇心	<i>M</i>	18.79	17.27	19.53	2.90**	0.41
($\alpha = .80$)	<i>SD</i>	5.60	5.41	5.56	(222)	
寛容性	<i>M</i>	11.45	11.99	11.19	-1.69	0.24
($\alpha = .86$)	<i>SD</i>	3.38	3.31	3.39	(225)	
接触経験						
小学校期	<i>M</i>	10.88	9.61	11.51	3.35**	0.43
($\alpha = .91$)	<i>SD</i>	4.48	3.68	4.71	(185.78)	
中学・高校期	<i>M</i>	9.98	9.20	10.36	2.00*	0.28
($\alpha = .92$)	<i>SD</i>	4.14	4.24	4.06	(226)	
IWM						
安定	<i>M</i>	19.85	19.56	19.99	0.56	0.08
($\alpha = .86$)	<i>SD</i>	5.51	5.66	5.44	(226)	
アンビバレント	<i>M</i>	23.27	21.91	23.95	2.69**	0.38
($\alpha = .82$)	<i>SD</i>	5.48	5.55	5.33	(225)	
回避	<i>M</i>	19.29	18.88	19.50	0.82	0.12
($\alpha = .76$)	<i>SD</i>	5.35	5.60	5.23	(226)	
他者意識						
内的他者意識	<i>M</i>	25.80	25.57	25.91	0.51	0.07
($\alpha = .86$)	<i>SD</i>	4.85	4.73	4.92	(226)	
外的他者意識	<i>M</i>	13.63	13.24	13.83	1.43	0.20
($\alpha = .68$)	<i>SD</i>	2.96	2.87	2.99	(227)	
空想的他者意識	<i>M</i>	13.89	13.64	14.02	0.84	0.12
($\alpha = .82$)	<i>SD</i>	3.20	2.98	3.30	(226)	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

を5件法(1.「全くちがう」-5.「全くそうだ」)で尋ねた。この尺度は、他者への関心の程度を測定するもので、次の3下位尺度から構成される。第1は、行動や表情として表出された他者の気持ちや感情に対する関心である「内的他者意識」(7項目)、第2は、他者の化粧や服装、体形といった外面への関心である「外的他者意識」(4項目)、第3は、他者について考えたり空想を巡らせたりする傾向である「空想的他者意識」(4項目)である。

結 果

まず、各尺度の信頼性係数(Cronbachの α 係数)を算出したところ、 $\alpha = .68-.96$ とおおむね許容できる内的整合性が示された(Table 1)。そこで、各尺度の項目について得点が高いほど、その尺度が表す態度や経験の程度が高くなるように得点化(逆転項目は低くなるように処理)し、合計得点をもって各下

位尺度得点とした。

各尺度の平均得点と男女差

各下位尺度の平均得点について、全体と男女別に算出した(Table 1)³⁾。*t*検定の結果、子どもへの関心では、好意的注目と好奇心で女性の方が得点は有意に高かった。接触経験では、小学校期および中学・高校期とも女性の方が経験は有意に多かった。IWMでは、アンビバレントで女性の方が得点は有意に高かった。他者意識では、いずれの下位尺度においても有意な男女差は見られなかった。

重回帰分析

子どもへの関心の要因について検討するため、まず、子どもへの関心と各尺度との相関係数を算出し

³⁾ 分析にはIBM SPSS Statistics 21を用いた。欠損値については*t*検定と相関係数の算出ではペアワイズ除去、重回帰分析ではリストワイズ除去を行って分析した。

Table 2 子どもへの関心尺度と各尺度との相関係数

		接触経験		IWM			他者意識		
		小学校期	中学・高校期	安定	アンビバレント	回避	内的他者意識	外的他者意識	空想的他者意識
好意的注目	全体	.30***	.30***	.21**	.03	-.04	.29***	-.01	.24***
	男性	.26*	.25*	.14	.10	-.20	.33**	.11	.49***
	女性	.27***	.30***	.25**	-.08	.01	.28***	-.11	.13
同情	全体	.24***	.20**	.24***	.10	-.17*	.30***	.02	.25***
	男性	.23	.15	.07	.18	-.17	.38**	.06	.30*
	女性	.23**	.21**	.33***	.03	-.18*	.26***	-.02	.23**
好奇心	全体	.21**	.15*	.21**	.10	-.08	.29***	.03	.25***
	男性	.06	.03	-.01	.12	-.09	.27*	.15	.35**
	女性	.22**	.18*	.30***	.03	-.10	.29***	-.06	.21**
寛容性	全体	.11	.03	.05	-.13	-.23***	-.03	-.07	-.05
	男性	.06	.02	-.06	.01	-.31**	-.13	-.02	.09
	女性	.17*	.06	.12	-.17*	-.18*	.02	-.08	-.10

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 3 子どもへの関心尺度の各下位尺度を目的変数とした重回帰分析結果 (値は標準偏回帰係数)

		接触経験		IWM			他者意識			$R^2 / \text{adj. } R^2$
		小学校期	中学・高校期	安定	アンビバレント	回避	内的他者意識	外的他者意識	空想的他者意識	
好意的注目	全体	.17*	.17*				.23***			.17/.15***
	男性	.23*						.45***		.29/.27***
	女性		.24**		-.21*		.34***	-.16*		.20/.17***
同情	全体	.20**				-.22***	.29***			.17/.16***
	男性	.32**			.23*	-.29**	.37**			.32/.27***
	女性			.29***			.18*			.14/.13***
好奇心	全体	.16*				-.14*	.27***			.12/.10***
	男性							.34**		.12/.10**
	女性			.25**			.22**			.14/.13***
寛容性	全体	.13*				-.24***				.07/.06***
	男性					-.30*				.09/.08*
	女性	.17*				-.19*				.06/.05**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

た。また、得点に男女差が見られたことを踏まえ、男女別にも相関係数を算出した (Table 2)。その結果、子どもへの関心と接触経験、IWM、他者意識との間にやや弱いながらも相関が見られた。そこで、接触経験、IWM、他者意識の各下位尺度を説明変数、子どもへの関心の各下位尺度を目的変数とした重回帰分析 (変数増減法によるステップワイズ法) を全体と男女別で実施した (Table 3)。なお、VIF は 2 未満であり、多重共線性はないと判断した。加えて、以下で関連を検討した各変数間の散布図を確認したところ、曲線相関となっているものはなかった。また、目的変数である子どもへの関心尺

度の各下位尺度について重回帰分析後の残差の正規性を検討するため、残差のヒストグラムを確認したところ、いずれもほぼ正規分布していた。よって、線形分析が可能であると判断した。

全体の結果 重回帰分析の結果、まず全体ではすべての決定係数が有意であった。有意であった標準偏回帰係数を見ると、接触経験では、小学校期の経験が子どもへの関心の全下位尺度に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .13$ -.20)。中学・高校期の経験は好意的注目のみに正の影響を及ぼしていた ($\beta = .17$)。よって、特に小学校期の接触経験の多さが子どもへの関心全般を高めていた。

IWMでは、回避が同情、好奇心、寛容性に負の影響を及ぼしていた ($\beta = -.14 - .24$)。よって、回避的な対人態度を有していると、子どもへの同情的な関心、子どもの生活や会話への好奇心、子どもの泣き声や大声への寛容さが低かった。

他者意識では、内的他者意識が好意的注目、同情、好奇心に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .23 - .29$)。よって、他者の気持ちや内面への関心が強いと、子どもを見て、かわいいと感じて生じる関心、同情的な関心、生活や会話への好奇心が強かった。

男女別の結果 男女別に重回帰分析を行った結果、すべての決定係数が有意であった。男女間で影響に違いが見られた点に注目すると、接触経験では、男性は小学校期の経験が好意的注目と同情に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .23, .32$) が、女性では寛容性に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .17$)。中学・高校期の経験は女性のみ好意的注目に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .24$)。

IWMでは、男性はアンビバレントが同情に正の影響 ($\beta = .23$)、回避が同情に負の影響 ($\beta = -.29$) を及ぼしていた。しかし、これらの影響は男性のみ見られた。一方、女性は安定が同情と好奇心に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .29, .25$)。

他者意識では、男性は空想的他者意識が好意的注目と好奇心に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .45, .34$)。しかし、空想的他者意識の影響は男性のみ見られた。一方、女性は内的他者意識が好意的注目と好奇心に正の影響を及ぼし ($\beta = .34, .22$)、外的他者意識が好意的注目に負の影響を及ぼしていた ($\beta = -.16$)。

考 察

本研究では、大学生における子どもへの関心の要因について、接触経験、IWM、他者意識の3つを想定し、それぞれが子どもへの関心に与える影響について検討した。その結果、特に小学校期の接触経験や他者意識が子どもへの関心を高めること、回避的なIWMが子どもへの関心を低めることが示された。以下では、これらの結果について考察する。

接触経験の影響

全体の結果では、特に小学校期の接触経験の影響が見られた。従来の子どもの態度の研究では、接触経験の多さが子どもへの態度を肯定的にすることが示されている (安積, 2007; 花沢, 1992; 中西・

牧野, 1989)。したがって、本研究においても先行研究と同様の結果が見られた。ただし、標準偏回帰係数は、高くても $\beta = .20$ であり、IWMや他者意識といった心理的要因の影響を考慮すると、接触経験はさほど強い影響力を有していないともいえる。これは、花沢 (1992) の小学校期から高校期にかけての一貫した接触経験の多さが肯定的な対児感情を育むとする指摘とは異なり、接触経験のみでは、子どもへの態度は規定されない可能性を示す結果であるといえる。

男女別に接触経験の影響を見ると、男性では小学校期の経験が好意的注目や同情を高めていた反面、女性では小学校期の経験は寛容性を高め、中学・高校期の経験は好意的注目を高めていた。したがって、男性では小学校期の接触経験のみが子どもへの関心に影響し、女性では小学校期、中学・高校期双方の時期の経験が影響していた。

花沢 (1992) によれば、男性は小学校期の接触経験が多いと対児感情のうち、子どもへの肯定的な感情である接近感情が高いが、中学校期、高校期の接触経験は接近感情に影響しないことを示している。一方、女性は小学校期、中学校期、高校期のいずれの時期においても接触経験が多いと接近感情が高いことを示している。これは本研究における男性は小学校期の接触経験が影響し、女性は時期にかかわらず接触経験の影響があると示す結果と一致していた。以上より、男性ではより早期の乳幼児との接触経験が子どもへの関心を高める効果を有するといえる。

Fullard & Reiling (1976) は、思春期以前では幼児図式への反応の強さ (乳幼児の写真に対する選好数) に大きな男女差は見られないが、思春期以降では女性の方がより強い反応を示すようになることを報告している。つまり、中学・高校期の女性は子どもの存在に対して敏感に反応するようになるため、その時期における接触経験が後の子どもへの関心の程度に影響するほど特別な意味を持つ経験になっている可能性がある。そのため、女性のみ中学・高校期の接触経験の影響が見られたと推測される。一方、小学校期では幼児図式への反応に男女差は見られないため、性別に関係なく接触経験の影響があったといえる。

2008年と2009年に改定された現行の学習指導要領から、中学校の家庭科で幼児とのふれあいが原則

必修化され、高校では学校ごとの選択項目となった(文部科学省, 2008, 2009)。石川(2000)は、幼児とのふれあい体験学習を経験した中学・高校生は学習後、幼児への肯定的感情が高まることを示している。本研究の結果からも、中学・高校期の接触経験は好意的注目を高めていたが、小学校期の経験は男女にかかわらず、子どもへの関心全般を高めていた。したがって、中学・高校のみならず、小学校期から幼児とふれあう機会を設けることが子どもへの関心を育むうえで必要であるといえよう。

IWMの影響

全体の結果では、回避的なIWMが同情、好奇心、寛容性を低めていた。これは、IWM尺度の回避に含まれる項目が他者への親密な関わりを避ける傾向を尋ねるものが多いためと考えられる。つまり、回避的なIWMを持つ者は、大人だけでなく子どもとも親密な関わりを避けようとするため、子どもへの関心が低くなるのであろう。また、Rholes, Simpson, & Oriña(1999)は、回避的な愛着スタイルを持つ者は、他者がストレスを感じている場面を目の当たりにしても、怒りや苛立ちを覚えやすいとしている。加えて、Rholes et al.(1997)は、大学生に自分の子どもに対して将来とりうる養育態度を予想させたところ、回避的な愛着スタイルの者は子どもに対して優しさに乏しく、忌避的な態度をとると予測したとしている。つまり、回避的なIWMを持つ者は子どもがストレスを感じて不安そうにしていたり、泣いていたりする状況に遭遇すると、苛立ちや忌避感が喚起されやすいため、同情や好奇心、寛容性といった子どもへの関心の側面が低くなるといえる。

男女別にIWMの影響を見ると、女性のみ安定的なIWMの高さが同情と好奇心を高めていた。女性を対象とした従来の研究においては、安定的なIWMが肯定的な子どもへの態度や養育態度と関連するという結果が報告されている。例えば、Rholes et al.(1995)は、安定的なIWMの母親は自身の子に対する親近感が高いことを示している。また、小池(2013)は、安定的なIWMが高い青年女性は子どもへの好意的感情や関心が高いことを示している。本研究においても、女性において安定的なIWMの高さが子どもへの関心を高める効果が見られたことから、先行研究と同様の結果が得られたといえる。

中尾・加藤(2003)は、本研究で使用した戸田(1988)のIWM尺度のうち、安定は項目内容から見て、社交性や初対面の人と親密になりやすい程度を測定するものであると指摘している。つまり、対人志向性の高さや他者との親密さを希求する程度が大人だけでなく子どもにも発揮されるため、安定が子どもへの関心を高める効果を持つのであろう。しかし、なぜ女性のみ安定が影響するのかという点については、今後さらなる検討が必要である。愛着スタイルと子どもへの関心との関連の男女差を詳しく調べていくことはアタッチメントの世代間伝達や児童虐待といった子育ての問題に対しても一定の示唆を与えることにつながるだろう。

他方、アンビバレントの高さは、女性では好意的注目を低めていた。しかし、男性ではアンビバレントなIWMの高さは同情を高めていた。つまり、アンビバレントなIWMが高いほど、子どもの不安や泣き、恐怖といった側面に敏感であった。Rholes et al.(1995, 1997)は、アンビバレント的な愛着スタイルを持つ者は子どもへの志向性が高いとしている。また、金政(2005)は、不安が高く回避が低い(つまり、アンビバレントな)愛着スタイルを持つ大学生は、他者のネガティブな表情に敏感であるとしている。同情は、不安や悲しみといったネガティブな表情を示している子どもへの関心の程度である。そのため、アンビバレント的なIWMを持つ者のネガティブな表情への敏感さが同情を高めたと推測される。Rholes et al.(1995, 1997)や金政(2005)では、IWMと子どもへの志向性、表情の読み取りの関連について男女差は考慮していないが、本研究の結果を踏まえると、子どもへの関心の向け方においては、IWMが男女で異なった働きをする可能性が示された。

他者意識の影響

全体の結果では、内的他者意識の高さが好意的注目、同情、好奇心を高めていた。この結果は、郷式(1999)の内的他者意識が高い者は子どもの心的状態に敏感であるという結果を支持するものである。内的他者意識は他者の気持ちや心に対する関心を表す。したがって、その高さが子どもを見て、かわいと感じたり、不安や悲しみを示している子どもへの同情的な関心を喚起させたり、子どもの生活や会話といった子どもの内面が反映される側面への関心

を高めたりするのであろう。一方、外的他者意識の影響は見られなかった。外的他者意識は他者の外見への関心であり、子どもへの関心尺度には子どもの外見への関心を測定する項目がないため、関連が見られなかったのであろう。

他者意識の各下位尺度においては得点に有意な男女差は見られなかったが、子どもへの関心との関連においては男女で違いが見られた。男女別に他者意識の影響を見ると、男性のみ空想的他者意識が好意的注目と好奇心を高める効果が見られた。一方、女性のみ内的他者意識が好意的注目と好奇心を高める効果が見られた。つまり、好意的注目と好奇心では、男性は空想的他者意識が、女性は内的他者意識が影響していた。

辻(1993)によれば、内的他者意識と外的他者意識は「現前する他者」に直接注意や関心を向ける「直接的関心」であるとされる。つまり、現実存在する他者への関心を意味する。一方、空想的他者意識は「他者が現前するか否かとは無関係」に成立する「連想的あるいは回想的関心」とされる。つまり、他者が目の前にいなくても、他者の存在を生き生きとイメージして回想し、注意や関心を向けることができる他者意識であるとされる。

子どもへの関心尺度の質問項目は、具体的な子どもの姿(泣いている、会話しているなど)をイメージして回答するものである。つまり、子どもの姿をありありとイメージできることが子どもへの関心尺度に回答する前提となる。しかし、Table 1で示したように、接触経験は男性よりも女性の方が高かった。より多くの接触経験があれば、それだけ具体的に子どもをイメージできるようになると考えられる⁴⁾。つまり、女性は男性より多くの接触経験を有していることから、現前する存在として子どもを具体的にイメージできるため、内的他者意識が子どもへの関心に影響する一方、男性は接触経験の少なから、現前する存在としてではなく、空想上のイメージとして子どもをイメージするため、その能力である空

想的他者意識の高さが子どもへの関心に影響したと考えられる⁵⁾。

ま と め

以上のように、本研究では子どもへの関心の要因について男女差を考慮しつつ検討してきた。その結果、先行研究での指摘と同様に、接触経験、IWM、他者意識のいずれもが子どもへの関心を高める効果を有していた。男女別では、男性は特に小学校期の接触経験が関心を高めていた。また、女性は安定的なIWMが関心を高めていた。そして、男性は空想的他者意識が関心に影響し、女性は内的他者意識が影響していた。

先行研究では本研究で取り上げた要因のいずれかを子どもへの態度の要因として検討しており、本研究のように要因を複合的かつ同時に検討したものではない。その点で本研究は、小嶋(1982, 1989)が述べた子どもへの態度には多様な要因が影響するという指摘を実証したものである。

核家族化や地域コミュニティの希薄化により、子どもとのふれあいが減少する今日において、子どもへの関心を高めることは、社会全体で子どもの育ちを支えていこうとする姿勢につながり、子どもや子育てに関する諸問題を解決するための一方略になるといえる。そのためには、接触経験を増やすだけでなく、IWM、他者意識といった対人態度全般を肯定的なものにすることが重要であることを本研究は示したといえる。

最後に今後の課題を述べる。本研究では接触経験の測定において弟妹がいる者の接触経験量を過剰評価することを避けるために弟妹との接触を除いた。しかし、幼少期・児童期において弟妹は非常に身近な乳幼児であり、その影響を考慮することも大切である。そこで今後は、弟妹との接触とそれ以外の乳

⁴⁾ 澤田・上手・奥野(2013)は、託児・育児サークル等に参加し乳幼児とふれあった女子大学生を対象に、体験前後での子どもへのイメージを分析した。その結果、体験前は表面的で漠然としていた子どもへのイメージが、体験後はより複雑かつ豊かで生き生きとしたイメージに変化するとしている。

⁵⁾ 女性の方が接触経験が多ければ、大人の他者をイメージする能力も高まるように汎化することが考えられたため、補足的に空想的他者意識と接触経験の相関係数を男女別に算出した。その結果、男性は小学校期との間で $r=.13$ (*n.s.*)、中学校期との間で $r=.21$ (*n.s.*)であり、有意な相関は見られなかった。一方、女性は小学校期との間で $r=.27$ ($p<.01$)、中学校期との間で $r=.17$ ($p<.05$)と有意な相関が見られた。よって、女性における接触経験の多さは空想的他者意識とも関連していた。

幼児との接触を分けて測定し、影響の違いを検討することが必要となる。

引用文献

- 青木まり 1988 母子関係の前段階：女子青年における「母性準備性」心理学評論, 31, 76-87.
- 安積陽子 2007 看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察：性別と乳幼児接触体験との関連から 甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編 創刊号, 1, 23-28.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol. 2. Separation, Anxiety and Anger*. New York: Basic Books.
- Fogel, A., Melson, G. F., & Mistry, J. 1986 Conceptualizing the determinants of nurturance: A reassessment of sex differences. In Fogel, A., & Melson, G. F. (Eds.), *Origins of Nurturance: Developmental Biological, and Cultural Perspectives on Caregiving*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, pp. 53-67.
- Fullard, W., & Reiling, A. M. 1976 An investigation of Lorenz's "babyiness." *Child Development*, 47, 1191-1193.
- 郷式 徹 1999 子どもの心的状態を読みとる大人の能力の個人差について：障害児および1歳児についての記述の分析 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45, 149-161.
- 花沢成一 1992 母性心理学 医学書院.
- 菱谷純子・落合幸子・池田幸恭・高木有子 2009 青年期の次世代育成力尺度の開発とその検討 母性衛生, 50, 132-140.
- 菱谷純子・落合幸子・池田幸恭・高木有子 2010 青年期の次世代育成力と親からの存在肯定メッセージとの関連 母性衛生, 50, 552-559.
- 井上義朗・深谷和子 1986 親になること：現代青年の子ども意識・親意識 小林 登・小嶋謙四郎・原ひろ子・宮澤康人(編著) 新しい子ども学2 育てる 海鳴社 pp. 71-94.
- 石川清美 2000 赤ちゃんふれあい体験学習の効果 2. アンケート調査からみた効果小児保健研究, 59, 159-162.
- 伊藤葉子 2005 中・高校生の「子どものイメージ」の発達 千葉大学教育学部研究紀要, 53, 85-90.
- 岩治まどか 2009 大学生の養護性の検討 東京家政大学研究紀要, 49, 133-142.
- 岩治まどか・井森澄江 2010 女子大学生における親準備性の発達(2)：入学時の養護性について 東京家政大学研究紀要, 50, 151-158.
- 金政祐司 2005 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響：成人の愛着的視点から 心理学研究, 76, 359-367.
- 川井 尚・恒次欽也・大藪 泰・金子 保・白川園子・二木 武 1983 乳児一仲間関係の縦断的研究 1：初期の発達の変化— 小児の精神と神経, 23, 35-42.
- 小川 真 2014 認知された親子関係は大学生の親準備性にどのような影響を及ぼすか 人間発達科学部紀要, 8, 43-48.
- 小嶋秀夫 1982 児童観研究序説：児童観研究の意義と方法 三枝孝弘・田畑 治(編著) 現代の児童観と教育 福村出版 pp. 4-41.
- 小嶋秀夫 1989 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫(編著) 乳幼児の社会的世界 有斐閣 pp. 187-207.
- 小嶋秀夫 2001 心の育ちと文化 有斐閣.
- 小池優美 2013 青年期女性の親性準備性と就学前及び成人期の愛着スタイルとの関連 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 19, 99-113.
- 棚澤令子 2009 1985年から現在までの我が国の養護性 nurturance の研究動向 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 15, 201-211.
- 棚澤令子・福本 俊・岩立志津夫 2009 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性(nurturance)へ及ぼす影響 教育心理学研究, 57, 168-179.
- Lorenz, K. Z. 1943 Die angeborenen Formen möglicher Erfahrung. *Zeitschrift für Tierpsychologie*, 5, 235-409.
- Maestriperi, D., & Pelka, S. 2002 Sex Differences in interest in infants across the lifespan: A biological adaptation for parenting? *Human Nature*, 13, 327-344.
- McArthur, L., & Berry, D. S. 1987 Cross-cultural agreement in perceptions of babyfaced adults. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 18, 165-192.
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領.
- 文部科学省 2009 高等学校学習指導要領.
- 中西雪夫・牧野カツコ 1989 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(第2報)：「準備状態」の形成に影響を与える要因 日本家庭科教育学会誌, 32, 55-59.
- 中西由里・粟津幹子 1996 「養護性(nurturance)」に関する一研究：幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較 椋山女学園大学研究論集, 27, 9-18.
- 中尾達馬・加藤和生 2003 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか?：4カテゴリー(強制選択式, 多項目式)と3カテゴリー(多項式)との対応性 九州心理学研究, 4, 57-66.
- Nash, S. C., & Feldman, S. S. 1981 Sex-related differences in the relationship between sibling status and responsivity to babies. *Sex Roles*, 7, 1035-1042.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店.
- 扇原貴志・村井潤一郎 2012 大学生の子どもへの関心とその関連要因 子育て研究, 2, 3-12.
- Rholes, W. S., Simpson, J. A., & Blakely, B. S. 1995 Adult at-

- tachment styles and mothers' relationships with their young children. *Personal Relationships*, **2**, 35-54.
- Rholes, W. S., Simpson, J. A., Blakely, B. S., Lanigan, L., & Allen, E. A. 1997 Adult attachment styles, the desire to have children, and working models of parenthood. *Journal of Personality*, **65**, 357-385.
- Rholes, W. S., Simpson, J. A., & Oriña, M. M. 1999 Attachment and anger in an anxiety-provoking situation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 940-957.
- 佐々木綾子 2007 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, **8**, 41-50.
- 澤田英三・上手由香・奥野雅子 2013 保育体験は女子大学生の子ども観・子育て観をどのように変えるのか? 安田女子大学紀要, **41**, 103-114.
- 鈴木幹子・清水洋子・伊藤裕子 2005 女子青年における育児性の発達 児童学研究: 聖徳大学児童学研究紀要, **7**, 89-94.
- 戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル—作業仮説 (working models) からの検討— 日本心理学会第52回大会発表論文集, **27**.
- 藤後悦子 2005 子育て中の親の「他人の子ども」へのナーチュランス (養護性) とその形成プロセスに関する研究 子ども環境学研究, **1**, 86-95.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房.

(受稿: 2017.6.12; 受理: 2017.12.15)
